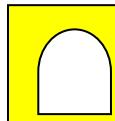


日吉台地下壕保存の会会報



第139号
日吉台地下壕保存の会

戦争しないとどうしようもないのか

会長 阿久沢 武史

「降る雪や明治は遠くなりにけり」(中村草田男)

平成が令和になり、昭和も遠くなりました。明治はさらに遠くに感じられます。明治を降る雪にたとえたこの句に対し、司馬遼太郎はその雪の白さを「倫理的緊張感」と言い換えています(『アメリカ素描』)。明治の人々には倫理的な緊張感があったという考えには賛否両論があるかもしれません、現代の問題を考えるとき、ふと立ち止まってしまいます。

令和になったばかりの5月、北方領土訪問に同行した国会議員の発言が大きな衝撃をもって受け止められました。「戦争でこの島を取り返すことは賛成ですか?反対ですか?」「戦争しないとどうしようもなくないですか?」——ここに政治家としての倫理的な緊張感は少しも感じられません。

私たちは戦争を体験された方々からの聞き取りを続けています。お話を聴きして感じることは、二度と戦争をしてはいけないという強い思い、緊張感です。それは「戦争はすべきではない」と言い切った元島民の団長の、あの毅然とした態度と共通するものです。

私(高校教員である私)にとって別の意味で衝撃的だったのは、35歳のこの議員が私の教え子世代にあたることです。ひとりの人間が発した言葉を考えるとき、どんな学校で学んだのか、何を学校で学んだのかということも問われるだろうと思います。日本で最も難易度の高い大学を出て、某省庁に入省したエリート、政治家を志す俊英の集まる著名な塾でも学んでいます。座右の銘は「誠意、万策に勝る」、実際の言動との落差に驚きます。

教育は人格を形成します。歴史を知識として試験のために覚えることと、深く認識することとは違います。クイズ番組の「物知り」が必ずしも「教養のある人」ではないように、点と点でつなぎだ知識だけでは、歴史を見る目(見識)は養えません。大事なことは考えることです。私たちは地下壕の暗闇と静寂、堅固なコンクリートの壁に囲まれた空間に立つとき、アジア・太平洋戦争に関するいくつかの本質的な問いに向き合うことになります。なぜ無謀な戦争を始めたのか、なぜ戦争を回避できなかったのか。そしてなぜ戦争をやめることができなかつたか。そうした問いに真摯に向き合う時間が少しあつたら、「戦争しないとどうしようもなくないですか?」などという言葉が出てくるはずがありません。

【目次】

- 巻頭言【1p】** 戦争しないとどうしようもないのか 会長 阿久沢武史
- お知らせ【2~4p】** 第23回戦争遺跡全国シンポジウム熊本大会
- 総会開催報告【5~8p】** 第31回日吉台地下壕保存の会・定期総会報告【8~9p】記念講演「日吉と鹿屋」をきいて 運営委員 小山信雄
- 報告【10~11p】** 戰跡をめぐるバスツアー「三多摩戦争遺跡と横田基地ウォッキング」の感想 第10期ガイド 佐藤由香
- 報告【12p】** 第13期ガイド養成講座終了しました 運営委員 佐藤宗達
- 報告【12p】** 「第24回平和のための戦争展 in よこはま」 平和のための戦争展 in よこはま事務局・本会会員 吉沢てい子
- 新聞記事【13p】** 若者 戦争と向き合う(神奈川新聞 2019.6.3)
- 聞き取り【13~19p】** 記・文責 運営委員 山田 譲
☆日吉・元通信兵 高田賢二さんのお話
☆学徒出陣・元特攻隊員 岩井忠熊さんのお話
- 港北今昔こぼれ話【19p】** 日吉台国民学校の謎の学童疎開 副会長 亀岡敦子
- 訃報【19p】** 寺田貞治さんが逝去されました
- 活動の記録(2019.4~7月)【20p】**

私たちの会は平成元年（1989）に発足し、平成の30年間を見つめ続けてきました。会員の皆様のご理解とご協力により、31回目の総会を迎えることができました。総会に先立って行なった講演会には、あいにくの悪天候にもかかわらず、高校生を含む多くの方々がお集まりになり、会場が満席になりました。あらためて「戦争」を考える人々の意識の高さを感じました。戦争というものの実相を知り、平和な社会を持続させたいという思いは、言い方を変えるならば「倫理的緊張感」ということになろうかと思います。

中村草田男の句は、昭和6年（1931）の作、満州事変の年にあたります。その時代の空気の中で、「降る雪」の白さに何を重ねようとしたのでしょうか。それを私たち自身の問題に置き換えるとき、現代の国会議員の言葉に背筋が寒くなるような嫌な予感を抱きます。

お知らせ

第23回 戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会要項 ～戦争遺跡の保存活用と地域をつなぐ平和活動～

【主催】 第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本 大会実行委員会
戦争遺跡保存全国ネットワーク

【後援】 熊本県 熊本県教育委員会 熊本市 熊本市教育委員会 熊本日日新聞社
RKK熊本放送 JCN熊本ケーブルネットワーク株式会社 ※全て予定

1. 大会趣旨

熊本は九州の中央部に位置し 1871 年鎮西鎮台の設置以降、熊本鎮台へ、1888 年には対外戦争を 想定した第六師団創設となり、熊本城を核として地域のなかに「軍都熊本」が形成されました。 1877 年、国内最後の内戦である「西南戦争」では熊本城をはじめ、田原坂・高瀬・八代・人吉 芦北・水俣等と、県内各地で戦闘が繰りひろげられました。熊本市北区植木町・玉名郡玉東町に 残された官軍墓地や戦闘地域等は国史跡「西南戦争遺跡群」として指定され、近現代遺跡・戦争遺跡の調査保存や資料館展示を通し、行政民間が一体となってその活用が進められています。

いっぽう太平洋戦争については、戦後 50 年の節目以降も、各地での平和展の開催や戦時体験を綴った記録・証言集、戦争世代から平和を願っての子ども達への文集が刊行されてきました。 戦後 60 年以降は、県内各地に残された太平洋戦争期の戦争遺跡の調査・研究や保存活動を行い、合わせて航空遺産をはじめとする戦時資料の調査や展示活動等を通して、「戦争の記憶を語り継ぎ、平和の大切さを学ぶ活動」が進んできました。この活動は熊本・八代・玉名・菊池・荒尾・人吉球磨・合志地域へとひろがり、連絡会議「戦争遺産フォーラムくまもと」として、戦後 70 年「平和のバトン展」での地域展示や「米軍資料から見た熊本空襲」講演会開催へとつながりました。そして地域に残された戦争遺跡に多くの方々の証言を重ね、平和を学び継承していく活動へと広がり、遺跡の一部は文化財としての保存が 実現するなど活動が実を結んでいます。

平成 28 年熊本を襲った未曾有の地震災害に直面し、隈庄飛行場油倉庫等の記録保存をはじめ、他の被害戦争遺跡・遺物の被災レスキュー活動等を進めるなかで、全国の皆様方にご支援をいただき、改めて全国との連携の大切さを知ることとなりました。 今回、熊本で初となる本シンポジウムの開催にあたり、全国の戦争遺跡の現状や課題を明らかにしていきます。また県民運動として熊本に「戦争と平和のミュージアム」設立をめざし、平和博物館活動等を進めておられる全国の皆様方と交流を深め、地域でつなぐ新たな平和活動として前進したいと願っています。「平成 28 年熊本地震」から復興しつつある熊本の姿を肌で感じていただき、さらなる「心の支援」の深まりを願い、当地熊本で全国大会を開催いたします。

2. 開催期日

2019年8月24日(土曜日)～8月25日(日曜日) 8月26日(月)は、現地見学会

3. 会場

熊本市国際交流会館 熊本中央区花畠4-1 Tel:096-359-2020

<http://www.kumamoto-if.or.jp/> □JR熊本駅より 熊本市電で約15分、花畠町下車、徒歩3分 都市バス、九州産交バス等で約10分、交通センター下車、徒歩約3分 タクシーで約10分 □熊本空港より 車で約45分 九州産交空港リムジンバスで約45分、交通センター下車、徒歩約3分 □九州自動車道 熊本インターチェンジより車で約30分 益城熊本空港インターチェンジより車で約30分

4. 日程と内容

(1) 8月24日(土):全体会・講演会 会場「国際交流会館ホール」6・7階(230人定員)

- 全体会: 12時00分～受付 13時00分～全体集会開会
- 主催者挨拶 堀浩太郎熊本大会実行委員長
- 記念講演 「熊本城と軍都熊本」 大阪大学名誉教授 猪飼 隆明氏 (いかい たかあき)
福井県越前市出身 熊本大学文学部教授 大阪大学文学部教授 2007年定年退官 大阪大学名誉教授 著書 『西郷隆盛－西南戦争への道』岩波新書 1992『西南戦争－戦争の大義と動員される民衆－』 吉川弘文館 2008『ハンナ・リデルと回春病院』 熊本出版文化会館 2005
- 基調報告 戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表 出原恵三
- 地域発表 くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 他1本程度
- 閉会挨拶 15時50分～ 会員総会 16時30分～ 分科会打合せ (報告者・運営委員)
- 17時会場閉鎖
- 17時30分～全国交流集会受付開始 (会費 6,000円)
会場 KKRホテル熊本 「有明・不知火の間」熊本中央区千葉城町3-31
[Tel:096-355-0121](tel:096-355-0121) <http://www.kkr-hoteru-kumamoto.com/>

- 交流会 18時～20時頃

(2) 8月25日(日):分科会、閉会集会 会場「国際交流会館ホール」6・7階(230人定員)

- 8時30分～ 受付
- 9時00分～15時00分 分科会
 - 第1分科会「保存運動の現状と課題」 第3会議室・4階(81人)
 - 第2分科会「調査の方法と整備技術」 第1会議室・4階(45人)
 - 第3分科会「平和博物館と次世代への継承」 大広間A・B・4階(104人)
- 15時10分～16時00分 閉会集会 □分科会報告 □大会アピール文採択 □閉会挨拶
- 10時～14時まで 図書交換会 第2会議室・5階
- 交換会での希望書籍は、別紙「書籍交換会希望用紙」を提出のうえ、現物書籍は「8月23日午前中の期日指定」として「熊本市国際交流会館(〒860-0806・熊本中央区花畠4-1)内の熊本大会実行委員会気付」でお送りください。

(3) 8月26日(月) 現地:見学会

- 熊本市民会館前(本大会会場の通り前)より乗車・降車予定。
- 見学会コース □熊本市内・近隣の戦争遺跡等を中心に午前1コース、終日1コースを設定しています。定員になり次第締め切ります。両コースとも最小催行人数30人で、この人数に達しない場合は受付にて代金を返金させていただきます。西南戦争期に関する「田原坂資料館」他の見学希望の方は、資料等を基に各自でご手配ください。なお、大会当日受付にて、年刊『田原坂』『飛び出す西南戦争MAP』等の啓発資料を準備します。
- Aコース(8時半～12時半頃) ※個人名簿一覧提出 予価2,500円 「熊本市内の戦跡をめぐる」熊本空襲慰靈碑(※車窓にて)、旧歩兵第十三聯隊食堂(現 熊本学園大学第

2体育館)、第十三聯隊正門・軍用道路、三菱熊本航空機製作所第一組立工場(現西部方面總監部九州補給支處)、義烈空挺隊慰靈碑、陸上自衛隊戦史資料室 □Aコース希望の方は、陸上自衛隊施設内の三菱熊本航空機製作所工場等を見学しますので、氏名・年齢・住所を申請書に記載します。申請書提出をご了解いただける方のみ見学可能です。なお、直前の参加希望は受付できません。

○Bコース(8時半~15時頃) ※昼弁当込み 予価3,800円 「菊池飛行場と黒石原奉安殿をめぐる」 旧陸軍傷痍軍人療養所再春荘内の空襲慰靈碑「留魂碑」、旧遞信省熊本航空機乗員養成所奉安殿、菊池飛行場ミュージアム、旧陸軍菊池飛行場内戦争遺構(給水塔・油倉庫・格納庫) ※活動報告・昼食:泗水公民館大研修室

5. 参加費等

○参加費 一般 2,000円(1日参加1,000円) 大学(院)生 1,000円(1日参加500円)

○高校生以下無料 □昼食弁当代 800円(8月25日分、お茶付き)

○見学会 Aコース:2,500円 Bコース(昼弁当付き):3,800円

6. 宿泊

宿泊場所については、実行委員会では斡旋しません。会場の桜町・上通・下通周辺には多くのビジネスホテル等があります。観光案内等を参考に、予め各自で手配ください。

7. 図書交換会

□交換会での希望書籍は、別紙「書籍交換会希望用紙」を別途提出のうえ、現物書籍は「8月23日の期日指定」として「熊本市国際交流会館(〒860-0806・熊本市中央区花畠4-1)内の熊本大会実行委員会気付」でお送りください。

8. 申込み先

□当日の一般参加も可能ですが、できるだけ事前申込をお願いします。 □くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク事務局高谷和生宛に、別紙の「参加申込書」に記入のうえ、同封・添付して、郵便もしくはメールでお申し込みください。 □郵送は、「〒865-0061 熊本県玉名市立願寺126-5 高谷和生」宛 □メールは、「23rd_kumamoto-symposium@googlegroups.com」宛 □「第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会」への参加は、くまもと戦跡ネットHP内の申込用紙をダウンロードして申込ください。 □問合せの電話 090-1513-5528(高谷携帯) □参加費払込先 ゆうちょ銀行 大浜郵便局 01750-1-67112 くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

9. 準備状況・大会要項他

第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会に関する準備状況は、くまもと戦跡ネットHP・<https://kumamoto-senseki.net/>を参照してください。

「第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム熊本大会」に関する大会要項・申込用紙等は、くまもと戦跡ネットHP内の熊本大会バナーから取得ください。



すずめの親子

事務局連絡先

第23回戦争遺跡保存全国シンポジウム
熊本大会実行委員会 事務局長 高谷 和生
(たかたに かずお)

〒865-0061 熊本県玉名市立願寺 126-5

◇携帯 090-1513-5528

◇メールアドレス:

takayanagi912@yahoo.co.jp

◇くまもと戦跡ネットHP

<https://kumamoto-senseki.net/>

総会開催報告**第31回 日吉台地下壕保存の会講演会・定期総会**

日時：2019年6月9日（土）13:00より

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

※以下の議案はすべて異議なく承認されました。

2018年度活動報告

◇会員数：個人336名 交換・寄贈団体：93団体

◇定期総会開催：第30回 2018年6月9日（土）来往舎シンポジウムスペース

記念講演「『大学と戦争』か・ら・思・う・こ・と」

講師：白井 厚氏（慶應義塾大学名誉教授 社会思想史）

◇運営委員会開催：2018/4～2019/3 10回

◇会報発行：4回 134号(5/14)～137号(1/24)

◇地下壕見学会：2018/4～2019/3 39回 2,095人

7/28の「夏休み見学会」は大型台風接近の為中止。

◇ガイド学習会／拡大ガイド学習会：2018/4～2019/3 7回 菊名フラット、来往舎

見学会ガイドの連絡・学習会。

◇第12回公開講座：2018年4月14日（土）（来往舎シンポジウムスペース）

「日本の戦争遺跡の調査研究と保存運動-神奈川県の地下壕を中心に-」

講師：十菱駿武氏（山梨学院大学法学部政治行政学科 客員教授）

◇第23回平和のための戦争展inよこはま：2018年5月31日（木）～6月3日（日）

神奈川県民センター 展示参加 日吉台地下壕紹介

◇港北図書館パネル展示会・ミニレクチャー・講演会：

展示会 2018年7月29日（日）～8月26日（日）

ミニレクチャー 8月12日（日）、8月26日（日）、

講演会 8月5日（日）『日吉キャンパスにある戦争遺跡』

◇第22回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知豊川大会に参加

2018年8月18日（土）～20日（月）（参加者 350名）

主催：戦争遺跡保存全国ネットワーク、第22回戦争遺跡保存全国シンポジウム

愛知豊川大会実行委員会

後援：豊川市、豊川市教育委員会、読売新聞中部支社、朝日新聞社、東海日日新聞社、東愛知新聞社、中日新聞社

8/18：全体会

記念講演 伊藤厚史氏「愛知県の戦争記念碑からみた戦争と国民」

基調報告 出原恵三氏（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）

「全国の戦跡保存の現状と新しく史跡指摘された戦跡」

地域報告 伊藤泰正氏（豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会）

「豊川海軍工廠平和公園開園と保存運動」

原 英章氏（歴史研究所 調査研究員）

「豊川海軍工廠 天竜峡分工場-戦争末期の工場疎開-」

8/19：分科会 第一分科会「保存活動の現状と課題」

第二分科会「調査の方法と整備技術」

第三分科会「平和博物館と次世代への継承」

8/20：フィールドワーク

Aコース：豊川海軍工廠平和公園と関連施設の見学

Bコース：渥美半島の戦争遺跡の見学

◇第26回横浜・川崎平和のための戦争展: 2018年11/2(金) ~4(日)

「地域の戦争遺跡からアジア太平洋戦争を考える」川崎市平和館

パネル展示会: 日吉台地下壕保存の会、登戸研究所保存の会、川崎中原の空襲・戦災を記録する会、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会

若者の発表: 「『慶應義塾と戦争』アーカイブ・プロジェクトの活動から」

「戦争を『考える』ということ-明治大学平和教育登戸研究所資料館での業務を通じて-」

講演: 一橋大学特任教授 吉田 裕氏 「アジア・太平洋戦争の現実-兵士の視点から-」

◇11/10(土) 白井厚研究会 OBG会で「日吉台地下壕と保存の会の活動-慶應義塾日吉キャンパスに残る戦争遺跡-」報告 小山信雄

(慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室にて)

◇11/29(木) 非核兵器平和都市横浜への要望書提出(横浜市長宛) 戦争遺跡の保存等も。
(横浜市非核兵器平和都市宣言市民のつどい実行委員会)

◇12/1(土)、2(日)「学徒出陣75年シンポジウム/研究報告『慶應義塾と戦争』」研究報

(慶應義塾大学三田キャンパス
南校舎ホール)

- ・「上原良司の新資料に見る虚像と実像」 亀岡敦子
- ・「<教材>としての 日吉台地下壕」 阿久沢武史

◇港北区地域のチカラ応援事業

- ・公開提案会 2018年4月21日(土) 港北区役所4階会議室
- ・中間報告会 2018年11月10日(土) 慶應義塾大学日吉キャンパス
来往舎
- ・最終報告会 2019年3月9日(土) 港北区役所4階1・2号会議室

◇ガイド養成講座:

第12期 2018/1~5 修了者5名
第13期 2019/1~5 修了者8名

※2019年4月6日(第12期3回目)には、「戦争体験を聞く」というテーマで、元慶應学徒兵・岩井忠正さんと元海軍電信兵・近藤恭造さんより、お話をいただきました。

2018年度 決算報告

(単位 円)

費目	2018年度予算	2018年度決算	備考
【収入の部】			
会費	300,000	216,500	181名
見学会資料代	500,000	574,320	
図書等頒布	100,000	5,900	
寄付金等	0	26,920	
港北区補助金	0	68,000	港北区地域のチカラ応援事業
繰越金	653,604	653,604	
計	1,553,604	1,545,244	
【支出の部】			
運営費	150,000	157,863	各種会合・打ち合せ等
事務費	140,000	113,308	事務用品費等
印刷費	110,000	84,292	会報・資料等
通信費	270,000	246,535	会報送付等
図書資料費	110,000	6,800	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	140,000	72,140	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	60,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	460,000	459,000	
予備費	93,604	0	
小計		1,199,938	
差引残高		345,306	次年度繰越金
計	1,553,604	1,545,244	

以上の通り報告します。

2019年5月29日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子 印

この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子 印

会計監査 山口 國子 印

2019年度予算(単位 円)

費目	2019年度予算	備考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	345,306	
合計	1,245,306	
【支出の部】		
運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送料等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	85,306	
合計	1,245,306	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。

2019年6月11日

日吉台地下壕保存の会 運営委員会

2019年度日吉台地下壕保存の会
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会長	阿久沢 武史			
副会長	亀岡 敏子	喜田 美登里	羽田 功	
運営委員	石橋 星志	上野 美代子	遠藤 美幸	
	岡上 そう	岡本 秀樹	岡本 雅之	
	小山 信雄	櫻井 準也	佐藤 宗達	
	鈴木 清俊	谷藤 基夫	中沢 正子	
	福岡 誠	宮本 順子	茂呂 秀宏	
	山田 譲	山田 淑子	渡辺 清	
会計監査	熊谷 紀子	山口 園子		
顧問	鮫島 重俊	東郷 秀光		

2019年度 活動方針

1989年4月8日、慶應義塾大学日吉キャンパス藤山記念館において「地下壕の保存を進める集い」が開かれ、「日吉台地下壕保存の会」が結成されました。参加者は約60名、会則や運営委員なども決まり、ここに市民有志の会としての活動が始まりました。5月10日には『会報』第1号を発行、会員数は128名と記載されています。

元号が平成から令和に変わりました。平成がその名の通り「平らかな」時代だったとは言えませんし、これから「令わしい（うるわしい）」平和な時代になるという保証はどこにもありません。会の発足は平成元年にあたります。小さな会ではありますが、私たちは自分の意思でここに集い、日吉台地下壕という窓を通して、戦争と平和、そして平成という時代を見つめてきました。『会報』はその記録でもあります。

あれから30年が経ち、今回が31回目の総会となります。私たちはこれまでの活動方針を継承し、変わらぬ足取りで歩みを続けます。昨年は見学会用の冊子『戦争遺跡を歩く 日吉』や『フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』(平和文化)の内容を見直し、一部修正を加えました。定例や学校関係の見学会をより一層充実させるのはもちろんのこと、今年も引き続き地下壕での勤務経験者や戦争体験者の方々からの聞き取りに力を入れます。昭和から令和に至る時の流れの中で、戦争を体験された方から直接お話を聞く機会は確実に少なくなっています。だからこそいま、一人でも多くの方にお会いし、記憶を紡ぐように語られる言葉を丁寧に記録する必要を強く感じます。会の活動は、『会報』をはじめ港北図書館でのパネル展示や講演会、「横浜・川崎平和のための戦争展」などを通して公開していきます。今年も横浜市港北区の「地域のチカラ応援事業」に参加し、地域社会とのつながりを深めたいと考えています。以上を踏まえ、2019年度の活動として、以下の方針を提案します。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

報告

記念講演・安藤広道氏「日吉と鹿屋」をきいて

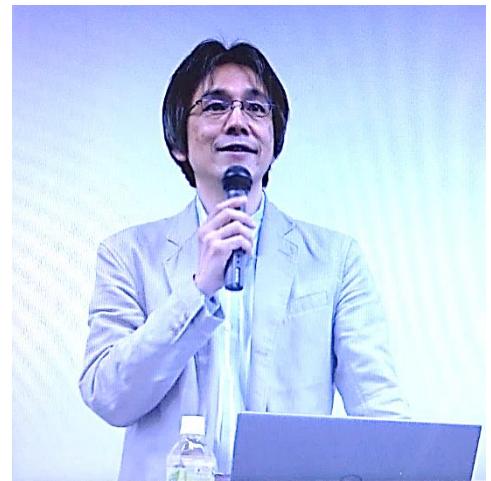
運営委員 小山信雄

6月15日(土)の記念講演では、安藤広道・慶應義塾大学文学部教授(考古学)より、「日吉と鹿屋—沖縄戦航空特攻作戦に関わる二つの司令部—」というテーマでお話し頂きました。アジア太平洋戦争末期の1945年3月以降の沖縄戦における海軍の軍事活動、特に航空特攻作戦について、鹿児島県鹿屋市にあった第五航空艦隊(5AF)と日吉キャンパスにあった連合艦隊司令部との関係を軸に、詳細な年表や資料を基に解説して頂きました。また、安藤教授が数年来進めている鹿屋地下司令部の調査成果について、当時の航空写真や現在の地下壕の写真などを交えて詳細に紹介して頂きました。最後に、地下壕など戦争遺跡の調査研究の進め方、保存公開してゆくことの意義についてお話しして頂きました。会場の来往舎大会議室

は、ほぼ満席状態であり、質疑応答も含めた2時間はあつという間に過ぎました。主な論点と感想は以下の通りです。

○日吉と鹿屋をめぐる戦史

- ・「航空特攻」というと「カミカゼ」「知覧」とよく言われているが、沖縄の航空特攻の全体像を考えると、「日吉と鹿屋」に置かれていた2つの司令部がとても大きな役割を果たして来たことにもっと光を当てるべきではと考えている。
- ・作戦の経緯等について「戦史叢書(防衛研究所編さん)」「戦藻録(5AF司令長官・宇垣纏の日記)」を元に整理。
- ・日吉に連合艦隊が来ることになった経緯、航空特攻が陸海軍の米英艦隊に対する作戦の中心になっていった経緯についての説明。本土に残る航空戦力(3AF・関東方面展開、10AF・練習部隊)を南九州に結集させた上で、鹿屋の5AF司令長官が指揮することになった(1945.3.20)。



講演される安藤広道先生

○鹿屋地下司令部の調査成果

- ・調査の切っ掛けは、鹿屋市から「近々埋め戻すかもしれない」との連絡を貰った為、調査開始となった。地下壕建設当時の詳細が記された「戦藻録」、鹿屋地元のボランティア組織「平和学習ガイド調査員」が進めて来た建設当事者の方からの聞き取り調査等、当時の米軍の航空写真、地下壕内の写真(情報局1945『写真週報』)等が大きな手掛かりとなった。
- ・地下壕の建設は、1945.2.10の5AF編成以前の1月から進められていた。
- ・構造:全長730m、一部コンクリート壁以外は素掘り、壁厚は10cmに満たない箇所多い、床面は全て土間、大きな部屋(作戦電話室)は幅3.5m、高さ3mほど。

○保存公開してゆくことの意義について

- ・歴史は過去の複雑な事象の絡み合いの中から、歴史を語る人、個々人が現在の立場からその人の知識や経験に基づいて幾つかの事象を選択し、それらの間の因果関係や相互関係を見つけて、話してゆくもの。⇒無限な組合せが存在⇒必ず多様に語られるようになってゆく。
- ・特攻に対しては極めて多様な意見があるが、特攻をどう評価するかによって、その内容は大きく変わってくる。
- ・我々を取り巻くあらゆる出来事(過去の産物)に対し何らかの理解をしなければ、どう行動して良いのか判断が出来ないので、生きて行く為には必ず過去の解釈が必要になる。但し、過去の解釈(歴史の理解)は多様にならざるを得ないということを忘れてはいけないので、異なる立場からの歴史との対話を繰り返し、自分を見つめ直すと共に、様々な意見を踏まえ過去を解釈する必要がある。
- ・英国の中学校の歴史教科書には「この教科書は大英帝国についてのわたしたちの解釈にすぎない」との記述有り(日本ではありえないことだが)。また、「支配された側の意見がない、女性視点の記述がない」等、教科書が自己批判している。
- ・歴史にとって重要なことは、真実(Truth)を追求することではなく、真摯さ(Truthfulness)を追求することである。

○感想

「多様な歴史が集まる結節点、対話が生み出される場」という言葉に一番強い印象を持った。見学会でのガイド、及び学習会等の場はまさにこの場所であり、これからも会の活動において、真摯さを持って、真実の追及に努めて行きたい思いです。

「近現代史におけるモノや場所の重要性」

※物的証拠や、物的証拠がある場所の意義を考える。

★歴史にリアリティを付与する(c.f.「純粹歴史性」)

- ・言語による過去の説明である歴史には、目に見える形がない。
- ・モノや場所は、語れる出来事が実際に起こったことを印象付ける。

★記憶を繋ぎ留め想起させる媒介

- ・モノや場所に触れることで思い出す過去のできごと。
- ・歴史を繋ぎ留める記念碑や記念物(記憶のトポグラフィー)。

★多様な歴史が集まる結節点、対話が生みだされる場

- ・モノや場所に触れながらの多様な歴史どうしの対話の意味。
- ・対話によって、自分とは異なるモノや場所の見方に気づく。
(「歴史への真摯さ」テッサ・モーリス=スズキ)

報告

戦跡をめぐるバスツアー「三多摩戦争遺跡と横田基地ウォッチング」の感想

第10期ガイド 佐藤由香

4月21日(日) 晴天に恵まれ、戦跡を巡るバス旅行に参加しました。今回は三多摩地域を訪問。最初に府中市白糸台掩体壕を見学しました。掩体壕とは空襲から戦闘機を守り、隠しておくための格納施設です。

旧陸軍調布飛行場周辺に約130基建造されましたが、現在は府中市と三鷹市に各2基を残すのみです。住宅街に突如現れる掩体壕は鉄筋コンクリート造りのドーム型。入口の幅12.3m、高さ3.7m、奥行き12m。内部は半地下式に掘り込んだ地面に排水溝や集水枡を設置、天井を見上げると、砂利混じりのコンクリートが露出していました。

次に、調布・三鷹・府中の3市にまたがる広大な「武蔵野の森公園」へ。離発着する飛行機を間近に臨む調布飛行場の北側に大沢1号・2号掩体壕があります。入口には格納した「飛燕(三式戦闘機)」のイラストが描かれています。「飛燕」は翼長12m、全高3.7mなので、ギリギリの大きさであったことが判ります。傍らに八重桜が咲いており、若者たちがこのような美しい季節に特攻機で飛び立っていったのかと胸が痛みました。



府中市・白糸台掩体壕（内部より）



無蓋掩体壕（昭和20年3月）

資料提供：公益財団法人東京都公園協会



飛燕と八重桜
調布飛行場周辺に作られた掩体壕にて

次に東大和市の日立航空機立川工場変電所跡に向かいました。こどもの歓声が響く都立公園の一角に建つ廃屋は異様な雰囲気。外壁は機銃掃射で穴だらけ、内部も階段の手すりや設備機器に弾痕が見られ攻撃の凄まじさを物語っています。戦争遺跡が見るものに訴える強いを感じました。来夏の全国戦跡ネットワーク開催地は東大和市との由、たくさんの方に見ていただきたいです。

続いて瑞穂町スカイホールに登り、横田基地(旧陸軍多摩飛行場)を遠望。オスプレイが見えたとか見えなかつたとか？！

最後に立川市・山中坂防空壕地蔵堂を訪ねました。ここは1945年4月4日の空襲で250枚の爆弾が防空壕入口付近に命中、中にいた42名全員が亡くなった場所です。地蔵堂の隣には「山中坂悲歌」の歌碑も建ち、地域社会で語り継がれることの大切さを感じました。

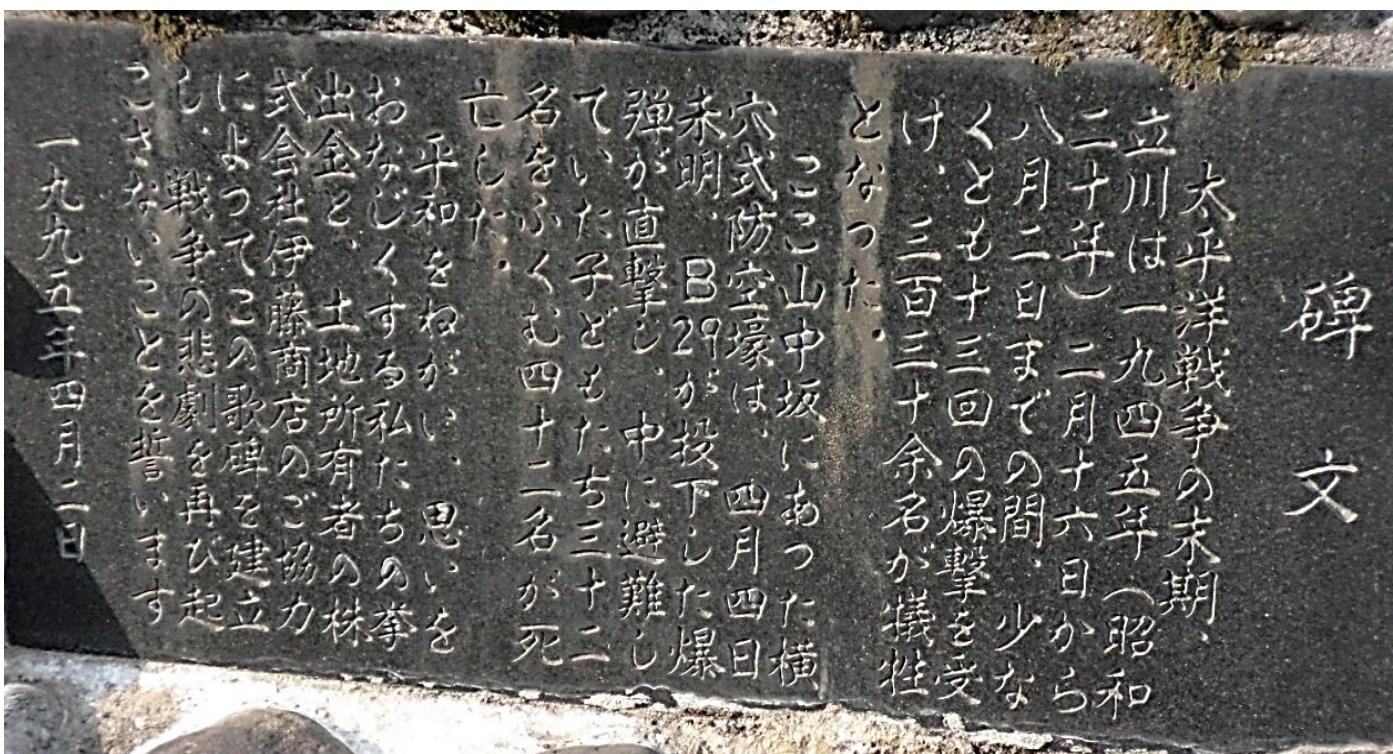
今回のツアーで多摩地域は、戦前・戦中は飛行場、軍事施設、軍需工場が置かれ軍都として



旧日立航空機株式会社変電所（戦災変電所）南面
◇東大和市指定文化財



存在したこと。その為に、数多くの空襲を受け甚大な被害を受けたこと。そして現在もなお、横田基地や米軍施設、自衛隊駐屯地として利用されていることを知りました。これから日吉台地下壕保存の会活動を行う上で、東大和市民の声で変電所が史跡指定されたこと、砂川闘争で声を挙げ続けた人がいることは、背中を押してもらえるお話でした。最後になりましたが、現地ご案内の竹内良男さん、下見及び企画してくださった山田さん、安全運転ドライバーの岡上さん、大変お世話になりました。ありがとうございました。



報告**第13期ガイド養成講座終了しました 運営委員 佐藤宗達**

今期は1月12日開講、10名の方が受講、5月11日に終了しました。第二回講座は3月9日にフィールドワークで日吉台地下壕群を見て廻りました。第三回講座は「戦争体験を聞く」をテーマにお二人の戦争体験をお聞きしました。今回は公開講座とし、一般の方々の参加もありました。詳細は会報138号に掲載しておりますのでご参照ください。第四回講座は5月11日に開催、見学会の流れ（事務手続き的なこと）を喜田さんから説明、見学会での役割分担・特に体調不良者への対応について山田淑子さんから説明、「ガイドの手引き」（改訂版）を使ったガイドポイントの説明を佐藤宗達がしました。その後今期受講者の意見・感想が述べられ、最後に阿久沢会長より、ガイド活動・戦跡保存運動の意義について「日吉台地下壕と教育」を熱く語られました。これは昨年12月に慶應義塾大学・三田キャンパスで開催された「慶應義塾と戦争」学徒出陣75年シンポジウムでの研究報告で発表されたものを基にガイドに「なにを伝えたいのか」「なぜ戦争をやめられなかったのか」と問題提起をされました。その後、受講者9名に阿久沢会長より修了書が手渡され第13期ガイド養成講座は終了しました。

報告**「第24回平和のための戦争展 in よこはま」報告**

平和のための戦争展 in よこはま事務局・本会会員 吉沢てい子

5月29日の横浜大空襲の日にあわせて開催してきた「平和のための戦争展 in よこはま」は、今年で24回目。5月26日(日)と5月31日(金)から6月2日(日)まで、かながわ県民センターで開催しました。

5月26日の「特別企画1」は「戦争と子ども」をテーマに、NHKスペシャル「駅の子の闘い～語り始めた戦争孤児」を3年間の聞き取りや資料を発掘し制作したプロデューサーの東條充敏さんの講演と映像、「横浜の戦争孤児を救った民間社会事業団体」からの大量の寄贈資料を分析した横浜都市発展記念館調査研究員の西村健さんの講演、沖縄戦や占領下の「福祉の空白の27年間」の下での沖縄の子どもの貧困を白書にまとめた沖縄大学名誉教授の加藤彰彦さんが講演。その後、パネルディスカッションが行われ、「戦争は結局、一番弱い立場の子どもが最大の犠牲に。戦争中はもちろん、戦争が終わってからさらに苦難の歴史が。子どもや弱者に目が向けられ安心して生きられる社会が平和な社会と言えるのではないか」と語られました。

6月2日の「特別企画2」は、「戦争・平和・若者」をテーマに、「登戸研究所から考える戦争と平和」と題して高校生たちの聞き取りで明らかになった真実など明治大学登戸研究所資料館の渡辺賢二さんの講演、桐蔭学園演劇部による「米軍機墜落事故の悲しみから」と題しての朗読劇、NGOグローカリー(市大生他)による「歩いて戦争を知る～広島そして横浜」の報告など次代を担う若者たちが戦争に向き合い、考え、調べ、行動してきたことを発表しました。小山内美江子実行委員長が体調不良で欠席のため、カンボジアでの若者と学校をつくる活動は大黒春江さんが代わりにスライド報告しました。

5月31日から6月2までの「展示」は、横浜大空襲から74年・戦争と子ども・教科書・横浜の戦跡・日吉台地下壕・野島掩体壕・登戸研究所・船と戦争・アジアでの戦争・被爆74年・被爆者の証言・占領下の横浜・横浜・沖縄の米軍基地・米軍機墜落事件から42年・憲法・平和のバラなど約500点。「戦争と子ども」のテーマをできるだけ各展示に盛り込むことや流れに沿ったレイアウトに変更しました。

6月1日・2日の空襲や被爆体験を語り継ぐ企画は、新聞の掲載もあり、会場あふれる参加者でした。アフターイベントがここ数年取り組まれ、今年は6月29日に金沢区の戦争遺跡を訪ねるフィールドワークを、8月には日吉台地下壕見学が予定され好評です。

神奈川新聞 2019.6.3

第3種郵便物認可

若者 戦争と向き合う 横浜、講演や朗読劇

朗讀劇を披露する桐蔭学園演劇部の部員たち
—かながわ県民センター

横浜市内の中高生や大学生が自ら調べて感じた「戦争の惨禍」を発表する講演会が2日、かながわ県民センター（同市神奈川区）で開かれた。戦争体験者を含む来場者約160人が、平和を語り合うことの尊さを確かめた。

(三木 崇)

74年を迎えた横浜大空襲（1945年5月29日）など、戦争資料約500点を展示する「2019 平和のための戦争展」in よこはま」の関連イベントとして実行委員会が企画。桐蔭学園（同市青葉区）の演劇部、同市立横浜商業高校（Y校）、同市南区の卒業生たちでつくる任意団体「NGOグ

ローカリー」に所属する同市立大3年生の福士紗英さん（20）らが登壇した。演劇部の中高生は1977年9月、同校近くの住宅街に米軍機が墜落し、母子3人が死亡、6人が負傷した事故を題材に、朗讀劇を披露した。

7年9月、同校近くの住宅街に米軍機が墜落し、母子3人が死亡、6人が負傷した事故を題材に、朗讀劇を披露した。

平和 つなぐ

劇は部員たちが事故現場を訪れ、「身近なところでこんな悲惨な事故があったとは知らなかつた」と驚く場面が始まった。同様の事が沖縄県などで相次ぐとを学び、「犠牲者をこれ以上出さないために、私たちに何ができるのだろうか」と問題を提起。「自分たちで調べよう、そして世界を見続けよう。平和に生きることを当たり前にする」ために」と、全員で声を合わせ、劇を締めくくつた。福士さんは「歩いて戦争を知る、広島そして横浜」と題し、横浜や広島で行った戦争体験者や戦跡を訪ね歩くフィールドワークを報告。若い世代に向けて「一步踏み出す勇気」と呼び掛けた。

明治大平和教育登戸研究所資料館（川崎市多摩区）の渡辺賢一さんは旧陸軍登戸研究所の実態を掘り起こした高校生らを紹介。「高校生が関係者の重い口を開けさせた」と述べ、戦争の実相に关心を寄せ続けている若い世代に期待した。

戦争展は、横浜大空襲の前後に催され、24回目。実行委員長の脚本家小山内美江子さん（89）は体調不良のため、講演会を欠席した。

聞き取り

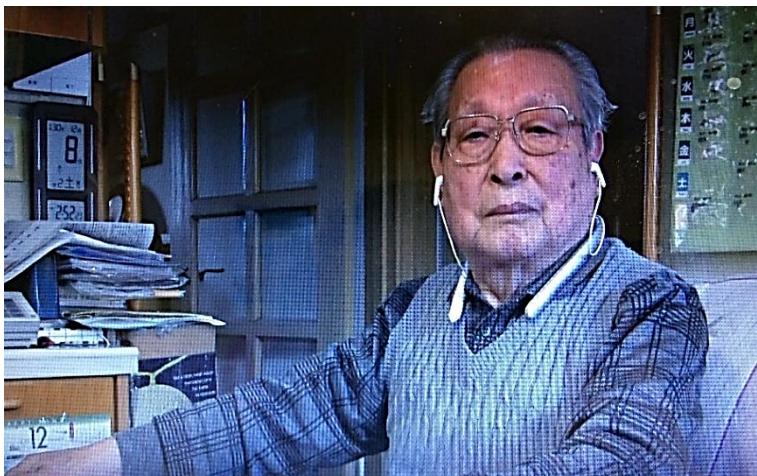
日吉・元電信兵 高田賢司さんのお話

運営委員 山田譲 記・文責

さる2018年12月8日に、日吉の地下電信室で勤務されていた元電信兵の高田賢司さんにお話をうかがいました。ご家族の方にも同席していただき、目黒区祐天寺のご自宅で、貴重な体験を聞かせていただきました。高田さんは92才のご高齢で耳がご不自由ですがはっきりとした受け答えで、とてもお元気でした。この聞き取りには阿久沢さん、喜田さん、小山さん、山田淑子さん、山田譲が参加しました。以下、その聞き取りの要約です。（ ）は山田の補足です。

なお、高田賢司さんは昨年7月21日の日吉見学会にご家族と参加されて、地下通信室にも行き「とてもなつかしい」と話されていました。

◎通信省で電信教育、中央電信局勤務のあと海軍に徴兵



高田賢司さん

大正15年（1926年）、宮城県生まれで、そのあと北海道に行った。たぶん開拓団か何かだったのだと思う。ここで尋常小学校を卒業した。一番上の姉の家は子どもがいなかったので養子になり、横浜に行った。西前高等尋常小学校を卒業して、昭和15年ごろ通信省に入省した。おじいちゃんに「お金がかからずに勉強できる」と言われ、試験を受けて合格した。それで、麻布の有栖川公園の下の普通通信講習所で1年間勉強した。横浜の保土ヶ谷駅から東海道線に乗って品川駅で降り、都電で通った。そこを修了した後、現場に1年いて、さらに高等練習所に入った。その後は東京駅のそばの中央電信局で何年か勤めた。電報の送信、受信をモールス符号でやった。モールス信号を打つ電鍵は（陸上自衛隊・久里浜通信学校歴史館のものの写真を見て）こういうのを使った。電送写真の研究もやっていた。自分はテレタイプ（紙テープに小穴をパンチした形で受信する）も読めた。

そのあと徴兵されたが、兵隊検査は受けなかった。いつ徴兵されたか覚えていない。繰り上げで19才ぐらいだった。（1944年に徴兵年令を19才に引き下げ。高田さんは1945年に19才なのでこの年に徴兵と思われます。）

横須賀の走水の訓練所に行かされた。カッター訓練は櫂が重くて立てるのが大変だった。「櫂立て」「櫂伏せ」がきつかった。ハンモックで寝る。体の訓練が多くて、通信の訓練もな



92式特受信機改4
(久里浜通信学校歴史館所蔵)



当時の海軍が使っていたモールス信号用電鍵とレシーバー（久里浜通信学校歴史館所蔵）

い。鉄砲の実弾も撃ったことがない。もっとも、もう日本はボロボロになっていた。それでも若いから自分は、第一線で戦いたい気持ちだけは強かった。

◎東京大空襲の死体片付け

昭和20年3月10日の東京大空襲の次の日位に、横須賀の学校からトラックで築地の海軍の建物に連れて行かれた。新橋駅あたりの海軍経理学校で何泊か泊まった。そこから死体の片づけをやらされた。木場（江東区）で材木をひっくり返すと、赤ん坊なんかおんぶしている死体が出てくる。沈んでいるのが材木を動かすと出てくる。それを揚げて、錦糸公園でならべたのを覚えている。それで1週間位して身寄りのない人は7段位に重ねて火葬した。つらかった。飯が食えなかった。

◎日吉への移動、地下壕内のベッドで疥癬に感染、カマボコ兵舎へ

走水の訓練所から、指名されて日吉に来た。しかし自分はそこが連合艦隊司令部だとはわからなかった。日吉には3人で来た。横須賀で他の人と会わされて、名前も何も紹介しない。一言もしやべらなかった。引率の人が私服を着ていて、どこにいくとも何も言わない。3人だけの変な移動だなと思った。日吉駅で降りて、どこに連れていかれるのかと思った。駅を降りて右側に3階建ての建物（第一校舎らしい）があって、その前を通って地下壕の中に入った。ほかの2人はそのあと、どこに行ったかわからない。

日吉にいたのは昭和20年3月からで、はじめは地下壕の中で何ヶ月か暮らしていた。2段か3段のベッドの上の段に寝た。水が垂れてくる。疥癬（かいせん 伝染性皮膚病）になってしまって、あまりひどかったのでカマボコ兵舎に一人だけ移った。そこで食事や、寝泊まりした。カマボコ兵舎は一棟しか覚えていない。地下壕を出た下の所で、1分とかからない。屋根の丸い兵舎で、入口は大きなカマボコ型。簡単なトンネル型の住居で、真ん中に通路があり両側に兵隊が寝ていた。出入口は両端にあり、番兵に敬礼して入っていった。

電信室では、両側に真っ黒い機械（受信機）が並んでいた。長さは50センチ位。電信室は広い部屋だった。受信機は通信系（周波数帯）によってボックス（コイル）を上から差し込む。（92式特改4受信機の写真を見て）これだ。照明は明るかった。暗号室や作戦室には行かなかった。寄宿舎にも行っていない。便所はよく覚えていないが、地下壕内ではなかったかと思う。電信室とカマボコ兵舎を行き来していただけだった。表には出なかった。休日もなかった。地下壕の出入口は大きくてコンクリートむきだしだった。偽装網などはない。

◎玉碎の電文、特攻機からの最後の通信を受信、米軍のハワイアンも

通信で一番記憶に残っているのは、玉碎の電文を暗号でなく生で打ってきたこと。どこかわからないけど、「敵上陸、敵が来た、もうダメだ」といって、それでパタンと終わってしまう。それが何回かあった。

その日ごとに電波（受信周波数帯）の割り当てがある。何を聞くかは決まっていない。特攻機を電波で監視していた。どこを通ったという通信が入る。ブザーみたいに信号だけで電文ではない。そういう電波が入ったら、「何時何分に信号が入った」、あるいは入らなかつたというのを書く。何機、通ったかもわかる。（特攻機の最後のツ——という長符連送を、何の説明も受けずに受信していたようです。）

通常の電文は数字が送られてくる。暗号で来るから数字の羅列で、それを受けたらすぐ流す。朝、一回、時間を決めて各部隊に指令が流されていた。受信したもの用紙に書いて、次々に流す。受信機の後ろにベルトコンベアがあつて、受信機の間から手を出して、そこにおく。取り次ぎ兵が、それを集めて暗号室に渡す。

休憩時間にはアメリカの第7艦隊の放送を聞いたり、ハワイの放送を聞いたりした。こつそりとだけど音楽、ジャズやハワイアンを聴いた。私はそういう音楽を聴いたことがなくて、はじめてだった。それを聴いた時は本当にうれしかった。病みつきになった。

食事はカマボコ兵舎で食べた。「鉄のお椀に鉄の箸」と歌に歌われていた。盛り付けを手伝う当番の時に自分の座る所にぎっしり詰め込んだが、席順をずらされてしまった。おなかをすかせていた。お汁はトマトの花の咲いたものとかツルまで入っていた。食料倉庫はよく見たが、コメが1俵ある程度で何もなかった。酒もなかった。その部屋に扉はなかった。近くに農家がありナシの畑があった。食べたかったが金網で境をしてあった。風呂は入った記憶がない。入ったはずだろうと思うが。水浴びなどはしていた。

◎ビンタの毎日、「負けた」と言われてホッとした

まわりの人は予科練のような若くて年下だが、階級は上のヤツばかりで苦労した。よくいじめられて殴られた。ビンタは毎日。バッター（海軍精神注入棒）も何回かやられた。連帶責任で全員がやられた。お尻を叩かれて体があたたかくなる。やるのは下士官、古参兵。

空襲は年中あって入口に爆弾が落ちるとひびきわたる。外に出ないので飛行機は見ていない。空襲警報も聞かなかった。カマボコ兵舎ではぐっすり寝ていた。作業衣のようなものを

着ていた。水兵服ではない。(白い事業服姿の通信兵の写真を見て) これですね。

終戦の玉音放送は、わけのわからない言葉の放送だった。「負けた」と言われてホッとした。みんなホッとしていた。そのあと捕虜にされるというので、自決用の短刀を渡されたが一晩で回収された。地下足袋をもらったら、これも次の日に回収。毎日命令が変わる。混乱していた。1週間かそこらで自分の持ち物、私物を全部燃やした。「身分をあらわすものを燃やせ」といわれた。

◎敗戦後はGHQでも勤務、中央気象台から煎餅屋さんに

復員となり、お米を3升位もらって帰った。浅草から東武線で栃木の親の疎開先に帰った。お米を売って儲けたと思ったら、ごまかされた。家族におこられた。横浜の家は線路際で、建物疎開で家を壊された。それで親は栃木に疎開していた。

通信省にいた時はテレタイプをやっていたので穴の印を読めた。航空通信の天気予報に使っていた。それで戦後は、気象台(今の気象庁)にいた知り合いの紹介で、日比谷のGHQの地下室でテレタイプの仕事をした。気象情報をやっていた。テレタイプを打てる人は、そのころ少なかった。そのあと中央気象台に勤めた。大手町の清麻呂公園(和氣清麻呂像がある)の前だった。長くはいなかった。何年位いたか。その後愛宕山の放送局に行き内幸町(NHK)に移った。あちこち歩いて転勤が多くて、ともかくおもしろかった。機械の点検を教えていた。

その後結核になり体を悪くしたので退職し、煎餅工場に勤めて先代社長に認められた。社長の娘と結婚して煎餅屋を継いだ。煎餅は作れば売れる時代で、よく売れた。横浜中華街に行って材料を仕入れてきたりした。材料がよかつたので売れた。

今、思いおこして覚えているのは、走水でやらされた櫂立てだ。重たくて、鉛筆しか持つことないのに、あの太い棒を立てるのだから涙が出た。なんであんなことをやらされたのかとおもう。

[追記——前号の「設備アレコレ」の記事で、カマボコ兵舎の図面を紹介しました。この図面を高田さんにお送りして見ていただいたところ、「自分がいた所は、こんな風だった」とのことでした。ですから日吉でも、あの図面にしたがって兵舎が作られていたようです。]

聞き取り

学徒出陣・元特攻隊員 岩井忠熊さんのお話

運営委員 山田譲 記・文責

5月25日に岩井忠熊さんの戦争体験をお聞きしました。岩井忠熊さんは、先号で記事に掲載した岩井忠正さんの弟さんで96才。特攻艇・震洋の特攻隊員でした。京都大学で学徒出陣し、戦後は歴史学者として立命館大学副学長をつとめられました。滋賀県にお住まい

ですが、兄・忠正さんの白寿のお祝いで上京される機会に、お話をうかがうことができました。足腰もしっかりされていて、自分の体験をしっかりと伝えたいと力のこもったお話しぶりでした。NPO法人ブリッジフォーピースの方たちとともに、遠藤美幸さん、亀岡敦子さん、山田譲が聞き取りに参加しました。以下は、その要約です。

◎海軍航海学校から特攻志願へ

戦争体験は、私の世代なら誰もあるが、特攻体験や乗船を沈められた体験者は、もうあまり生き残っていません。それを記録に残してもらえば本望です。当時、付き合いのあった人が、年賀状の名簿から完全に消えました。

なんで自分はあんなことをしたのかと自分の反省



岩井忠熊さん

として今でも考えるが、水雷学校校長の大森仙太郎中将が大村湾の魚雷艇訓練所で若い将校を集めて深々とお辞儀をして、「自分たちが不甲斐なくてこんな状態になってしまった。申し訳ないが死んでほしい」と言った。あの頃の青年は、あのような頼まれ方をすると断れない。中将と口をきくのも初めてだった。イヤと言えない。子どもの時から積み上げられた教育の結果です。

私が特攻に行く前に行かされたのは、横須賀の航海学校でした。ここで「航海士は絶対たすからないぞ」と言いました。航海士は艦船のブリッジで勤務する。見通しのいいように艦橋には隙間があけてある。上から飛行機で攻撃され狙い撃ちされる。「貴様ら助からんぞ」と普段から言われていて、どうせ死ぬんだと思っていました。しかし負け戦で船がなくなつてきて、航海士もいらなくなつた。それで特攻に回したということです。航海学校修了直前に「特殊任務」の募集がありました。「危険をともなう」というだけの説明で「航海士より危険」という。全くわからなかつたが「イヤと言ったら男じゃない」という意識をまんまと利用されたと今は思います。形式的には志願でした。

甲と乙の2班に分かれて横須賀を出していく時、この号令をかけたのが自分でした。一度、東京に行って汽車で博多、そこから長崎県川棚の臨時魚雷艇訓練所に行き、そこで特攻の基礎訓練を受けました。甲班はそこから回天隊に送られ、乙班はそこに居続けて震洋隊でした。

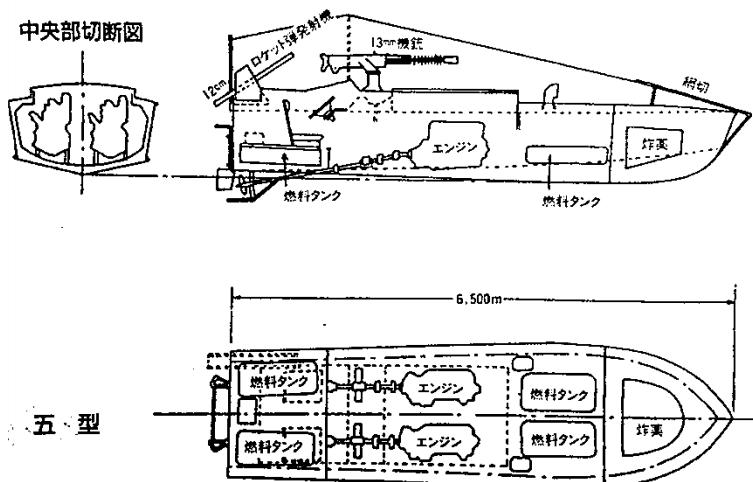
◎チャチなベニヤの震洋艇訓練、輸送船が沈没したが運よく救助

震洋は兵器としては単純で、高速のモーターーボートです。アメリカ軍は上陸するために、輸送船から上陸用舟艇でやってくる。これに震洋艇でぶちあたる訓練です。船乗りの基礎訓練は受けていたが、こんなチャチなボートの訓練ではありませんでした。ここに予科練（飛行予科練習生）の連中が送りこまれてきました。旧制中学の4年生位で予科練に入ったが、もう飛行機を作れなくなつてしまつて、飛行機がない。震洋隊にきたが海のことは全く知らない。カッター訓練などのもつとも初步的なものも受けていない。三重航空隊・奈良分遣隊から回されてきました。船乗りの基礎訓練からやる。その教育を自分たちがした。震洋に一対一で乗り込んで教えました。本来の教育課程の途中はぬかして2ヶ月ですませてしまい、それを部下にして震洋隊をつくりました。

米軍の上陸予想地であるフィリピンのコレヒドールに行くことになりましたが、途中で船が沈められてしまうので、結局、配備の重点は、台湾から南西諸島、沖縄、奄美大島、そして九州の西岸、小笠原、本州の伊豆下田などになりました。

私は「石垣島に行け」と言われて佐世保を出港し、奄美大島の西で魚雷2発を受けて船はあつという間に轟沈し、ほとんどの人が死んでしまいました。私は海に飛び込んで3時間、木材につかまって浮いていました。木材につかまることができて救助されたのはごく少数で2割位でした。どういうわけか、自分はすごく運がよかったです。

震洋の事故でも3回助かりました。衝突事故にあっても死ななかつた。近くに海軍兵学校の分校があり、生徒に訓練を見せました。その時、同乗した海軍兵学校74期の少尉がいいところを見せようとして危ないことをした。私は学生出身なので遠慮があり言わずにいたら、他の艇とぶつかってしまった。震洋はベニヤ製だから、すぐ壊れてしまいます。



震洋五型（岩井さんが乗った2人乗り型）
『日本特攻艇戦史』木俣慈郎著（光人社）より

◎「これで役に立つか?」とみんな思った

そのころ、海軍兵学校最後の卒業74期で任官した者が大量に来ました。戦艦大和の沖縄水上特攻の時、この海軍兵学校74期の士官たちは出撃前に下船させられました。乗艦したばかりで役に立たないのでじやまでした。しかし学生出身の予備士官4期は、昭和19年12月から乗っていたので降ろされませんでした。

大和水上特攻の艦隊の生き残りの人も震洋隊の上部にきました。駆逐艦「涼月」の艦長だった人が突撃隊天草派遣隊の指揮官になりました。この天草で私は終戦となりました。みんな、「震洋隊などをつくって、役に立つか?」と思っていました。朝日新聞の記者が来て記事を書いていましたが、相当脚色して書いていたのだと思います。

魚雷艇訓練所は川棚突撃隊という勇ましい名前にかわりましたが、私はバラックの三角兵舎にいました。第三特攻戦隊司令官の渋谷(清美)少将が、わざわざ天草まで視察にきました。めったにないことです。オート三輪、通称バタバタと呼ばれた3輪小型トラックに乗つてきました。それなりに重要な基地だったのだろうと思います。

他にも台湾総督をつとめた長谷川清大将も川棚にきました。天皇の特命で各地を視察するように言われて来ました。その時、私はロサ弾(ロケット式散弾)を発射しました。これを発射したのは、自分は初めてでした。しかし、それらの報告書は散々だったそうで、それもポツダム宣言受諾の根拠のひとつになったようです。ロサ弾はただ発射するだけで、照準ができません。それでも相手からすれば脅威を感じるでしょうが。

◎天皇のために死なない

私は兄・忠正と出征前に墓参りに行き、その時、新潟にむかう汽車のなかで兄と話しました。兄は「海軍に入ったら死ぬんじゃないかと思う。しかし天皇のために死なんぞ」と言いました。「天皇」と口にしたら危ないので、二人ともドイツ語で「カイザートゥーム」(天皇制)と言いかえて話しました。「天皇陛下万歳」と表向きは言わされるが、ハラの中では「国民のために死ぬんだ」と言いかえて、自分を納得させていました。

軍人勅諭の5ヶ条というのがありますが、海軍はその5ヶ条だけ暗誦させていました。陸軍では軍人勅諭は全文暗誦ですが、海軍では訓練生の時には就寝前に5ヶ条を言うだけでした。赴任先ではそれもありませんでした。海軍は技術的な教育が多かったからか、あまり天皇のことは言いませんでした。タタキ上げの特務士官(下士官から昇格した士官)は、裏で皇族のことを馬鹿にしていました。皇族出身の小松中将は「佐世保鎮守府長官の時、パンの耳のところを食べなかった」などというヒソヒソ話を、予備士官の私たちにささやいていました。

死にそうな体験をしましたが、私が大学にもどって勉強したかったのは、負けるような戦争をなぜ始めたのか? 納得いくまで知りたいと思ったからです。国力を総動員する威力が天皇にある。一種の絶対的なものと言われている。天皇制のことを考えたのは戦後になってからです。それは、それまでの自分の生き方とかかわる問題だったのです。

〈岩井忠熊さんの軍歴〉

1922年(大正11年)熊本市生まれ

1943年12月 京都大学在学中に学徒出陣 横須賀第二海兵団(武山海兵団)に入団

1944年2月 海軍予備学生に合格

7月 横須賀海軍航海学校に入校

10月 長崎県川棚の臨時魚雷艇訓練所に赴任、兄・岩井忠正さんと再会

12月25日 少尉任官、水雷学校教官となる

1945年3月 第39震洋隊・艇隊長に赴任

3月22日 石垣島行きの輸送船・道了丸に乗船、アメリカ潜水艦の魚雷攻撃で沈没。

救助され川棚にもどり、ふたたび教官

6月8日 天草派遣隊・茂串基地の第106震洋隊・艇隊長に赴任

8月9日 長崎原爆の大爆発音を聞き、巨大なキノコ雲を見た

8月15日「作戦緊急信」でポツダム宣言受諾詔書を伝えられた。その後、復員し京都大学に復学（この軍歴は岩井忠正・忠熊共著『特攻 自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言』による）

軍人勅諭の5ヶ条

- ・軍人は忠節を尽くすを本分とすべし　・軍人は礼儀を正くすべし
- ・軍人は武勇を尚ぶべし　・軍人は信義を重んずべし　・軍人は質素を旨とすべし

港北今昔こぼれ話

日吉台国民学校の謎の学童疎開

副会長 龜岡敦子

1944（昭和19）年になると、激しくなった都市部の空襲を避けるため、地方への疎開が始まりました。3月には疎開促進と空地利用（食糧増産）と、学徒勤労動員の通年実施が閣議決定され、地方に親戚のある家庭は、肩身の狭い思いをしながらも、疎開をしました。馴染んだ暮らしと隣人から離れるのは、どんなに悲しいことだったでしょう。そして、「なにがなんでもカボチャを作れ」のスローガンのままに、空地に野菜を植えました。そのうえ7月には国民学校高等科と、中学校低学年の生徒の勤労動員が決められて、わずか12、13歳の子どもたちまで、学びの場を追い出され、工場などで働き手となりました。

そして、それより幼い小学生（昭和16年に尋常小学校という呼び方から国民学校に代わる）は、学童集団疎開が決められ、その対象となった、東京都・川崎市・横浜市・横須賀市・大阪府・神戸市・尼崎市・門司市・小倉市・戸畠市・若松市・八幡市・沖縄県の都市部の小学3年生から6年生は近隣の受け入れ先に疎開しました。横浜市でも中区、西区、神奈川区などが小田原や湯河原などに疎開した経験談は、多く書き残されています。

しかし、港北区はまだ郊外の農村地帯であったため、避難するのではなく、受け入れているのです。高田町、小机町、鳥山町にはその記録が残っています。また、縁故疎開児童が増加したため、児童数が増加し、午前午後の2部授業を行ったという記録もあります。そんな中で唯一、日吉台国民学校だけが避難対象となり、8月19日に、学区内にある下田町の真福寺と、隣接する高田町の興禪寺に疎開しました。人数については、120人とも170人ともいわれていますが、体験者は自分の家がすぐ近くにありながらの集団生活のつらさと寂しさを語っています。そして、20日後の9月10日に海軍省人事局功績調査部が、東洋一といわれた校舎を接收します。疎開対象外の1年生と2年生は海軍と同居しながら授業を受けていたのでしょうか。知りたいこと、調べるべきことが謎の向こうにみえてきます。

訃報

2019年4月、「日吉台地下壕保存の会」の生みの親であり、育ての親である寺田貞治さんが、穏やかに逝去されました。86歳でした。寺田さんは慶應義塾高等学校で地学を教える傍ら、日吉台地下壕の調査研究を始め、1989年に会を立ち上げました。この会が、慶應義塾教職員だけではなく、地元の自治会長など地域活動の担い手や、市民を巻き込んでの保存活動となったのは、寺田さんの人脈のおかげです。その人脈は、行政やマスコミともつながり、全国で戦争遺跡保存にかかる人と団体の組織である「全国戦争遺跡保存全国ネットワーク」の設立にも広がりました。

当初百数十人で始まった当会は、30年を経て3倍の会員を持ち、活発な活動を続けておりますが、これも、永戸会長と寺田事務局長が築き上げた基盤に負うところが大きいのです。

心から感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

活動の記録 2019年4月～7月

- 4/17(水) 運営委員会（来往舎205号室）
 4/21(日) バスツアー「三多摩戦争遺跡と横田基地ウォッチング」27名参加
 4/24(水) 慶應義塾高校見学会 36名
 4/25(木) 会報138号発送（来往舎205号室）
 5/8(木) 定例見学会 44名（スウェーデン旅行者28名）☆外国からの旅行団は初めて
 松代大本營他、戦争遺跡を巡るツアーリング
 5/11(土) ガイド養成講座④
 （来往舎中会議室）
 5/13(月) 日吉地区センター主催講座
 36名（日吉地区センター）
 5/16(木) 運営委員会（来往舎205号室）
 5/20(月) 地下壕見学会 日吉地区
 センター主催講座 36名
 5/25(土) 定例見学会 67名
 5/26(日) 「第24回 平和のための戦争展 in よこはま」講演会
 （かながわ県民センター）
 5/30(木)～6/2(日) 「第24回 平和のための戦争展 in よこはま」
 5/30 展示準備 5/31～6/2 展示・講演・朗読劇・報告（かながわ県民センター）
 6/5(水) 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会（法政第二高校教育研究所）
 6/11(火) 運営委員会（来往舎205号室）
 6/12(水) 定例見学会 31名
 6/15(土) 2019年度総会 記念講演「日吉と鹿屋」安藤広道氏
 （来往舎シンポジウムスペース）
 6/22(土) 定例見学会 60名
 7/3(水) 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会（法政第二高校教育研究所）
 7/6(土) 拡大ガイド学習会（来往舎 中会議室）暑気払い（日吉キャンパス麺コーナー）
 7/9(火) 運営委員会（来往舎205号室）
 7/10(水) 地下壕見学会 40名



5月8日、チャペルでの定例見学会

★地下壕見学会について（予約申込が必要です。）

- ・定例見学会は原則として毎月2回実施（第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分）☆定例の8/24(土)は実施しません。「夏休み見学会」として7/31(水) 8/3(土) 8/10(土) 8/14(水) を予定（定員に達している日もあります）

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田（午前・夜間）

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 （見学会・その他）喜田美登里：横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

（年会費）一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

（加入者名）日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会